

## 8

## マユンキキさん

**マユンキキ (アイヌの伝統歌を歌う「マレウレウ」メンバー/アーティスト)**

SIAF2017では大友良英ディレクターのもと、企画メンバーとして複数のプログラムを実現する。SIAF2020以降は、アイヌ文化コーディネーターとして、SIAFのアイヌ語公式名称、アイヌ語テーマを考案、アーティストへの専門的なアドバイスをを行う。また、アーティスト・ミュージシャンとしても参加している。

**トーク内容**

- 2014:オープニングに実施されたカムイノミと小書き片仮名事件
- 2017:記者会見のワークショップを皮切りに企画メンバーとして複数のプロジェクトを実現
- 2020:「国際」も「芸術」も「祭り」も単語にはないアイヌ語でのSIAFの正式名称
- 2024:LAST SNOWから派生したアイヌ語サブテーマとアーティストとしての関わり



インタビュー全編はYouTubeでご覧いただけます。  
<https://youtu.be/3aLQb5jLp60>



---

## Q 札幌国際芸術祭のアイヌ語名称はどのように作られましたか？

札幌国際芸術祭をアイヌ語に訳す時に考えたのは、アイヌ語にはもともと「国際」も「芸術」も「祭り」もないので、どう訳すべきかということでした。ですが工夫すれば表現できないことはない。今回の場合は「いろいろな国から技能のある人が集まる」というように芸術祭を捉え、アイヌ語では「Usa Mosir un Askay utar Sapporo otta Uekarpa」と表現しました。でも、本当は毎回考え直していきたいぐらいに思っているんです。その年によってテーマも違いますから、その都度変えていけたらなと思っています。

SIAFは初回からアイヌに関するプログラムがあって、2014ではカムイノミや、「北の大地をこほぐ」というアイヌ舞踊を取り入れたプログラム（これは中止になってしまったけど）がありました。2017からは私が関わることになり、「アイヌ」に関することを意識的に扱うのではなく、ナチュラルに要素として入っていると感じています。ですので、2020からテーマとタイトルのアイヌ語表記が行われるようになるのは自然な流れだったと思っています。

## Q これまでの海外での経験を踏まえて、先住民やその文化との関わりについて、アドバイスがあれば教えてください。

日本以外の国で、非先住民のアーティストが先住民やその文化を作品の中で扱いたいとなると、非先住民であるという当事者性にしっかり向き合っていたり、自分が踏み込めない領域があることを理解していることが多いように思いました。一方、日本でアイヌに関することを扱いたいという相談を受ける際には、こういった意識が希薄なように感じます。日本では自分の当事者性についてを深く考えるきっかけがなかなか無いからかもしれません。

これからも色々な人がSIAFに関わっていくだろうし、アイヌに興味を持たれることも増えると思うのですが、その際には歴史認識として「自分の属性」については意識する必要があると思います。現状、SIAFでは私がアイヌ文化アドバイザーとして関わっているので、そういったことを必ず話し合っているのですが、本当は私がいなくても、多くの人がかちんとした認識を持って、他者の文化に触れられるようになるといいなと思っています。面倒くささらず、そういう話を丁寧にしていくしかないというのはありますね。

---